学院福音化2022年10月

１０月の序論のポイント５つ

１．聖餐式

イエス・キリストの十字架の恵みによる救いに対する確信と感謝

２．集 中

私たちの霊的状態が変わった。　死　→　いのち　＝再創造

３．特別祈り

神様の絶対計画、エジプトや荒野のような今のところに

４．定刻祈り

たましいは、みことば祈りによって生きる（いやし）

５．まことの答え

御座の力、時空を超越した神の国の祝福をこの世でも味わう

第４課　エルサレムに入られたイエス（マタイ 21:1-11）

フォーラムのポイント　「神の国の生き方の原理」

9 そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。」
10 こうして、イエスがエルサレムに入られると、都中がこぞって騒ぎ立ち、「この方は、どういう方なのか」と言った。

みなさん、「七王国の玉座」という話を知っていますか。
七つの王国を治めるための王座を得ようとする戦い、その戦いが続く話です。

善悪の知識の木の実を取って食べてしまったアダムの子孫たちは、自分が善悪を判断する主体者となって、神様なしで、それどころか神の座に自分が立って王となろうという欲望を持って生きるようになりました。力ある者もない者も、すべてそのようにします。力のある者はどんな方法を使っても、自分よりも力がない者を押しのけて王座に立とうとして、力のない者は、自分より力ある者を前に立てることをしてでも、自分が王になろうとします。その中心には「私」があります。結局、方法はちがっても、王座に立とうとする欲望は同じです。

創世記６章のノアの時代に、洪水でさばかれるようになった罪の内容はなんでしょうか。
ネフィリムです。
ネフィリムとは、なんでしょうか。「巨人、勇士、名のある者たちとして生きようとする堕落した者たち」です。

創世記６章４節から７節を見てみましょう。

4 神の子らが、人の娘たちのところに入り、彼らに子どもができたころ、またその後にも、ネフィリムが地上にいた。これらは、昔の勇士であり、名のある者たちであった。

5 主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。

6 それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。

7 そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」

先週まで見ていたマタイ18章から20章の内容を思い出してみましょう。

・天の御国で偉い人になろうとする弟子たち。

・自分の力で借りを返せると錯覚していた者。

・律法と戒めをすべて守ったけれど、自分の持っている財産は、あきらめられなかった青年。

・私がもっと働いたから、私は他の人よりもっと報酬をもらうべきだと思っていたぶどう園の労務者。

・自分の子どもたちが、もっと高い地位について、もっと仕えられる者になるべきと思ってイエス様を訪ねた母親。

このすべてのことが、王座に立とうとする人間の欲望を見せています。

神様を離れたすべての人は罪人です。

神様の恵みとあわれみによる救いだけが絶対に必要な者です。

今日の本文の内容のように、「ホサナ」と切実に叫ばなければならない者です。

「ホサナ」とは、「いま救ってください」という意味です。

罪と死に対しての恐れによって叫ばなければならないことばです。

しかし、ユダヤ人は自分たちは罪人であること、罪人であるゆえに受けるしかない永遠の死に対する恐れ、そこから出て来る「ホサナ」を叫んだのではありませんでした。

ローマの圧政、迫害、貧しさからの解放を叫んだ「ホサナ」でした。

ユダヤ人たちは、選民思想に陥っていました。自分たちは神様に選ばれた民だから、神様が必ず救ってくださると考えていました。しかし、救われることもない異邦人であるローマが自分たちを苦しめている、その現実から逃れさせてくださいと叫ぶホサナでした。自分たちが待っているメシヤは、その役割をする方でなければならないと思っていました。それが「民族メシヤ思想」と言います。政治的、軍事的に力があって強いメシヤを待っていたのでした。

イエス様は、罪と死の原理から、ご自分が選ばれた民を解放するために来られた天の王です。

しかし、ユダヤ人は、この世の現実から解放をもたらしてくださる王を待っていたのでした。

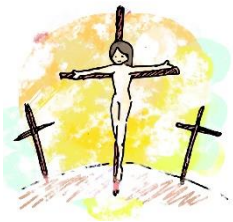
イエス様は公生涯３年間の間、いろいろな奇跡を見せてくださいました。
病んでいる者、悪霊につかれた者をいやし、
水の上を歩き、５つのパンと２匹の魚で何千人もの人を食べさせ、
死んだ人を生き返らせるという奇跡さえも行われました。

大祭司、パリサイ人、律法学者たちは、当時、力のある者たちでした。
安息日を守らず、律法も戒めも守らないイエスが、自分たちより民の人気をもっと得ていることに恐れを感じました。また、貧しく力のない民たちは、イエス様を自分たちの王として立てれば、必ず、自分たちに利益が与えられると信じていました。それゆえ、白馬でなく、ろばの子に乗ってエルサレムに入ってこられたイエス様を喜んで歓迎しました。しかし、イエス様が自分たちが願っているメシヤではないと分かったら、「ホサナ」と叫んでいた人々の叫びが、「十字架につけろ」という叫びに変わります。

神の国の生き方の原理は従順にあります。
イエス様は、天の王です。しかし、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間のかたちで来られました。
ご自分を低くして、死にまで従い、十字架で死ぬまで、父なる神様のみこころに従順にされました。
そのようなイエス様の生き方をすることを、神様が許されて、神様が喜ばれたのです。

ピリピ 2:6-9

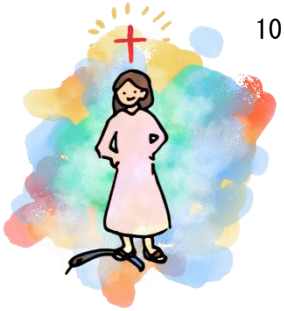
6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、
7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。
人としての性質をもって現われ、
8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。



このように弱い姿で来られ、死にまでも従順にされたイエス様を、神様は神様の右に高く上がられました。
使徒の働き２章で、ペテロの説教で、その内容を語っています。

そして、イエス様はまことの勝利者であると言われています。
ピリピ 2:9-11

9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。
10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、
11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。



このように、イエス様が従順の生き方をされ、
そのことによって私たちを救ってくださいました。
そして、助け主聖霊を送ってくださり、
その従順の座に私たちを導いてくださっているのです。
それが神の国の生き方の原理です。

私たちも神様のみこころに、みことばに従順にする座で生きなければなりません。
無条件に、譲りなさい、低くなりなさいと言われているのではありません。
福音ゆえに、すべてを譲ることができるということです。
そのようにイエス様について行く者が、まことの勝利者です。

イエス様は、エルサレムは入られるとき、みすぼらしいろばの子に乗って入られました。
しかし、再臨されるときは、白馬の王として来られ、私たちを神の国の新婦として迎え入れてくださいます。

黙示16:11、16
11 また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実」と呼ばれる方
　であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。
16 その着物にも、ももにも、「王の王、主の主」という名が書かれていた。

その日まで、私たちは信仰の希望を持って、従順の生き方をして勝利しましょう。